



発達障害の精神病理Ⅳ
—ADHD 編—

内海 健, 兼本浩祐 編著
神尾陽子, 芝 伸太郎, 鈴木國文,
福本 修, 松本俊彦, 吉川 徹,
義村さや香 著
星和書店
2023年6月 244頁
本体価格 3,400円+税

古くから論じられている ASD と違って ADHD は、比較的新しい疾患概念である。治療薬が上市されたこともあり 2000 年以降に ADHD は注目され、小児のみならず大人の ADHD にまでその関心の対象に広がり、ADHD ではないかという視点で診察すると大人でも疑わしい人々をよく見かける。特徴的な症状が 6 つ以上、6 ヶ月以上続いて認められるという操作的診断基準を満たさなくてもスペクトラムという概念でこの疾患を捉えると多くの人があてはまってしまうのかもしれない。発達障害であるためうつ病や統合失調症よりも若年層からみられ、遺伝的関与が強く、また発症という起点が明確ではなく、生活のなかで問題化するかは本人を取り巻く環境に大きく影響を受ける。主症状である多動、衝動、注意障害の現れ方に個人差があるため、この疾患の病理を論じることは難しいと思われる。このようななかで著者らはあえて「発達障害の精神病理」と題したこのシリーズから ADHD を出版したことに驚きを感じる。

本書は、ADHD に関するワークショップの講演内容をまとめたもので、3 部 9 章の構成からなり、9 名の精神科医による専門的立場の意見を紹介している。全体を通じて小児よりも大人に焦点をあてた内容である。

第 1 部の「エキスパート編」では ADHD の人が示す、自暴自棄と利他的行動、ギャンブルや薬物への依存傾向といった行動の背景を理解するキーワードとして、遂行機能障害、報酬系の障害、時間処理の 3 つをとりあげ、今までの報告を整理しながら説明している。ただ単に、症状だけ

を抽出して診断し、非薬物療法と称して認知行動療法や環境調整で治療をしても治らないことも多く、彼らが抱えるもう少し根っこのところをしっかりとおさえておくことが、悪循環に陥ることを防ぐ意味でも必要であろう。「動機の構造」では、この悪循環を「こじれ」と表現し、早期介入の必要性を強調している。多様性や個性があることから、病気そのものだけでなく生活史を十分理解することや、併存疾患が多くあるためその影響に十分配慮することを忘れてはならない。ADHD の病理の本質は、生得的な特性よりも、この「こじれ」による悪循環を止められない、避けられないことにあり、そのため将来の自分への投資ができるような支援が重要であると述べている。「エキスパート編」を第 1 部にもってきていることから、本書はすでに ADHD に関する基礎知識を修得した読者層を対象にしていると思われたが、比較的初心者でも理解しやすい内容となっている。

第 2 部「臨床編」では薬物依存症の臨床、subclinical bipolar disorder 仮説を基にした観念連鎖の自律性、そして精神分析的アプローチに関して 3 名の精神科医がそれぞれの視点から述べている。精神病理に馴染みのない人にとっては何度も読み返して咀嚼しないと吸収できないが、臨床をするうえでのヒントを与えてくれるであろう。第 3 部「精神病理編」では、著名な先生の ADHD に対しての精神病理的視点が凝集されており、随所に症例提示を挿入していることで、理解しやすいように工夫がなされている。著者らも ADHD の病理は未開拓の領域であると述べているように、当然引用文献も少なくエビデンスを求めることはできないが、この書を起点として ADHD の精神病理の研究がさらに進んでいくことが望まれる。ADHD の治療は薬物療法では不十分であり、患者が抱える苦悩を可能な限り軽減させ、社会に適應していくことが求められるが、それに応えるために、ADHD の人の症状や心情の理解を深めることは意義があり、精神病理の素養の有無に限らず、若手医師にも一度手にとって読むことをお勧めする。

(忽滑谷和孝)